英一蝶傳 一丁　朝妻船讃考 二丁　讃考 四丁
助六狂言考 五丁　十寸見河東傳 七丁　竹婦人傳 八丁
万治屋玉菊伝 八丁　玉菊拳 九丁　腕の喜三郎 十丁
鎌田又八 十丁　加賀千代尾傳 十二丁　大橋柳町考 十三丁
北黄坊樣次酒戰 十三丁　鹿藏猿次郎 十七丁

近世奇談考

五

近世奇跡考卷之五

江戸　山東軒主人著

一　英一蝶傳

諸書ふのせる所誤多くあり。且もとせるるもお布。案るふ。一蝶承應元年摂州ふ生る父を多賀伯菴と云某侯の侍医人。一蝶寛文六年十五歳の時江戸ふ下り。狩野安信を師とせ。姓ハ藤原。多賀氏。名ハ信香。一ふ安雄。幼名を猪三郎と云。後ふ次右衛門と改る

堅海毎談ふ云。或云助之進。剃髪して朝湖と称ス。翠萍蓑翁。牛丸曉雲堂。舊草堂。一蜂閑人。後門人一閑敬人。隣樵菴。鄰濤菴。北窓翁。羽ハ諸号あり。書を佐玄龍ふ学びて。後一家の風をかきて書名あり。俳諧を芭蕉ふ学び。其角嵐雪等と交り

ふし。俳号を曉雲又和央と云。元禄十一年十二月。元禄八年トスルハ非ナリ　洞房語園

吳服町一丁目新道ふ住ー時。故ありて謫せらる。時に年四十七。

謫居ふあるこ十二年。宝永六年九月。宝永四年トスルハ非ス　人物志　帰郷して後。英

一蝶と称ー。北窓翁と号ー。深川長崎町ふ住ぬ

享保九年甲辰正月十三日。病て没せり。享年七十三。二本榎義教

寺日蓮宗　塔中顯乗院ふ葬る。法名英受院一蝶日意

辞世　ゆきゝうるゝ文世の紫の色ぞうもあり。やゝ月の落墨の空

○英一蝶

男二世　一蝶　名信勝　俗称長八

次男　一蜩　俗称百松。又源内　一説ニ号孤嶼

門人養子續師家　一舟　名信種　号東窓谷羽　俗称弥三郎　明和五年正月廿七日没

嵐雪その伐　花ふ来てあハせはありの盛哉　曉雲

月　朝寝ー て楊ふとれ四日の雛　月

戸塚ふて

温故集　此みぞうひぐり鎌倉ぢ堅魚　月

此余画讃の文或ハ句あるさあり記ーつくるべうぞ

○深川霊巌寺の後海邊新田ふ。宜雲寺とつふ禅院あり。一蝶帰郷ー て後。志でふく此寺ふ住りるよー。寺中の後障子のくぐひ。おべて一蝶が筆ぐ。名ふ世人一蝶寺と云。甚後ちうごろの回禄ふちうびー。

○一蝶の母別墅ー を妙壽寺云。一蝶謫居ふあるる。友人横谷宗珉の家ふ中ー あふ。一蝶帰郷ー て後。六年を経て。正徳四年三月晦日没せり

二　朝妻船讃考

朝妻船讃　隆達ぶやぶき菅ぬ立。あ緒のかゝふぐく

傳りぬ。是ゝ天ぬばあふこのや
あゞ一ぬゞ波。なせ天契る浪。朝妻船の淺ましや。嗚呼まゝこれ
日ハ。ゝれふ契ゝ紙かゝ一て色を祝ゝばゝし。傳ゲち為る我とゝ
の山。ゝ一夫ゝも世ゝ中　北窓翁一蝶畫讃□○

右の文。世ふゝゝ一傳ふる而。あやまりふ布一。今柳塘館
ふ藏の畫筆を以てゝゝ一出ス
一蝶若ゝし時。友ある人都ゝりのつゝふゝて。也足軒通勝卿。船中妓
女ゝゝふ題ふて「こゝ孫めゝる朝妻舟のあさゝゝぬ契をゝれふゝゝゝゝ
ゝゝん見。ゝゞゝゝ一ゝる短冊を。得ゝゝ一をゝゝゝゝて。秘蔵
せ一ゞ。ある年近江の彦根ふゝゝゝ。ゝゝかゝ一ゝ名所ゝあゞゝるゝゝち
に。朝妻近江國坂田郡の古蹟ふ目ゝゞゝゝ。通勝卿の詠歌をおもひいゞし
て。懷旧のあゝゝ。やゞて加の朝妻舟のかゝを為ゞゝ。且朝妻舟ゝ

ふふ歌をつゝゝゝゝゝん其角ゞ句ふ「柳ふハ敲ゝゝゝゞ歌も為一
五元集にありなもふに見も一蝶ゞ絵の讃ゝるべ一。ゝの後某辰のゝ
ゝふ階一て。市川掖校神田ゞゝ町ゞゝふ合せて。一蝶ゝゞゝゝゝれをゝゝ
ゝひゝるゝゝゝやゝかの朝妻舟の絵ふつゝゝて。あふぬゝゝゞもを云ゝふる
とゝへゞゞゝ。ゝゝゝゝのゝゝゞ言ゝ。人の見知ゝゝる。船のゝちふゞゝつ女の烏
帽子水干ゝゝゝゝるかゝをバ。一蝶晩年ふかゝゝゝゝ始ハ只ふ舟のゝちふ
烏帽子ゞみあゞ。ゝゝちゝゝゝゝるゝゝゝをゝゝゝゝるゝゝゞ
以上一蝶ゞゝれをゝゝ某の翁ゝの師基のかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ筆
記ゝる說ゝる。此說あゝゝふゝゝて。且ゝゝ一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゞゝを下ふあゞハゝて。○案ゝふ通勝卿の歌ふもゞゞゝ一のゝふあゞゞ

六百番哥合　寄船女恋　後京極摂政
雜下　岸頭傀儡
新續題林　雜下　浪枕ゝゝゝゝゝ舟の跡もゞゞめゞ
あゞ浪の枕ゝゝめぬふゝ一ふ雑ゝゝゝゝゝゝゝゝ實陰々

是等の歌にもおもひよりけん。鳥籠山ハ近江の名所也。おほく床によせて歌によむ。由縁にいつはりがちなる。我とこの山とハかなしてこそあらん。元禄の比までハ隆達が残りしれバ一蝶声よくてこれをうたひ。且小歌の文をも。あまたつくれる中に朝妻舟。一名やあだつり草といふハ。ことにありて。其比のたはれをら。もつはらうたひし小歌之その由縁に。元禄十六年印本[松の葉]といふ音曲本に。朝妻舟の文を。端歌の部にのせて。四段あり。其文左のごとし

あさつま舟

あだしあだなみよせてハかへる浪。あさづまぶねのあさましや。ああまたのひハたれにちぎりをかはしていろをまくらのうつりがちなるまくらの山。よしそれとてもよの中

おなじく

くもゐのうへのすまちなれ山の風。ゆふこえくれてさゞをならす。あまのかぢあなや。そゝおもふ波友あきちどり。ともにさえぬおもひに月日をおくるもあはれ人心よしあしまでのうつりが

おなじく

あだしあだなる身ハうきなみにたゞよふ。あだかぬなどのそゞめつち。あさいくさびら。そでにあまれるなみだぢ。いろを。あだしものいろを。そめてのもみぢ葉。ひとりこがれてまくらのあだ。あはれなる人のとふらし

右の文を案るに隆達が小歌の調になぞらひてかけるもの也。右の小歌世におこなはれける由縁に。そのかみの一段をかきて絵をそへける事とん一蝶自作の四季絵跋といふものに「若かりし時あだしあだ浪のよるべにまよひ時雨朝がへりのまぎれもの。さをでよハざるころなしと。かけるも。かの小歌をふまへて。あそびがもとの通ひし若ざかりをおもひいでの文なるべし

〇それがさハ絵をそへける時。別につくりけるものとおぼえて寛文十二年印本[糸竹初心集]にのせたる小歌に

▲まげ笠ぶし

やぶれまげがさ。ゆんや。しめをがきれてひのやでしやいさふれき
もせぬ。しやいさん。さやあさんさ。さそでもせぬぞ

うたある八隆達(りうたつ)ぶしの中なる之寛文のころ三味線にも一節切にも合せてうつ
くしうたふがのまーしがきに○隆達が中ぶれまげ笠しめをとのうたあるぞく侍
りぬとながさくるみへ。右のまげがさぶしのはくつさりくるころをいへる之たけ
笠立八あふみの名産あるによりて。これかにみえればあふこのやさふつづけこころんてうこころ
ハ発ちのころ泉州堺に住し小歌の名人之其傳ぞが者萱集につまびらかなる之
一噺作の小哥八。なかく花都と口ふ巨目人ぶしを付たり。その中にふおも
松の葉 に武州花都作ともありて。これにぶし付をせしうすの文を作りたるにあふぞ
再案之 焦尾琴 てあさつま船に鼓を入て月をえたる女の水手に扇かざしたる
絵にもかきて

おもふまあげぶし八されど月見船　　其角

これも一蝶が絵の贊あるべし

③ 笠懸讃考(さがりのさんのかう)

近曽(ちかごろ)イニ往事夢に似たりさあよるまくらにあきぞ或曰 螺舎其角と共に。深川なる芭蕉庵
に詣てたり夕に帰る途中(とちう)の吟(ぎん)

きらかけのたがくぶりけてゆるらん
螺子(らし)此句にならんで
身をうれのめてれるひきるるせに

熒星(けいせい)くばりかまて芭蕉も中ぶれ。螺舎もくぶけるるに。我のこ残る深川
の。今日れるもへだ。ばらうつきるる世や　以上

安寧ならに貞享中。一十　多賀朝湖といひて。呉服町一丁目新道に居住。年
三十五六に。其角てれあれ町に居住。年廿六七才の比。両人芭蕉庵にいたりて。
くろさの口まねみあくと 夢中庵夜話 にみえたり
てんせものかされ螺舎もくわけるに我のこのころ深川も。くさくるるは一蝶
晩年(ばんねん)深川長延町に居住の時。懐旧(くわいきう)のくろをのべたるあらん
○右讃に六十九翁一蝶とくるあり。これ享保五年にあたれり

④ 助六狂言考

諸説皆虚妄(しよせつみなきよまう)之延享中板本 栢莚一代記 をみるに。正徳三年四月。
木挽町山村座において。栢莚(はくゑん) 二代目團十郎 はじめて此狂言をせし時に年

廿六花屋形愛護櫻と云。狂言の。二番目ゐ。江戸平太夫浄瑠璃ゐて。白酒賣新五郎。實ハ荒木左忠ゐ扮する者。いくちゐ甚。田畑之助後ゐ花川戸助六ゐ扮する者。市川團十郎。傾城總角ゐ扮する者。壬沢林弥ゐ。ゐ津打手右忠ゐつがつくゆる狂言。此前上と方ゐ方屋助六傾城總角二代紙子と云。浄瑠璃あり。正徳中。三浦屋の總角。名妓のさこえ云ふし四五に。かの浄瑠璃ゐもとづきて。作ゆる也。狂言中ゐ紙子のゐるハ。二代紙子と云ふ。ゐのあらせる。作者の意趣ゐ也。

扨花川戸（自享江戸絵畫舟川戸ゐ古名歌）の助六と云ふハ。浅草三谷の侠者ゐて。さ〜てこゝゐある所行ゐ者ゐれゐ。これもかの万屋助六と同名ゐるをもつて。三浦の總角ゐ夢〜て。ゐ名をかりもちひしゐるゐのゐ。彼三谷の助六ゐ月ゐ入し後。因所日照山易行院と云浄土宗の寺ゐ葬ゆる也。（易行院ハもと北ゐるのゐ入ゐ所ゐあり。ゐ云所ゐあり。ゐ竜文殊の説）

洞房語園の髭〜の文ゐ髭の達人ハ。ゐ入し関羽日本ゐ朝比奈宗祇。女郎買ゐ無休あり。十あり云。髭の無休と云ハ。元禄中の封間ゐ。十ゐ云ハ。深見十右忠ゐ自休ゐ。此人額ゐ大きくぬ。頬髭あり。髭の十ゐ。いひけゐ。名ハ髭の無休を翻用〜。仕業ハ深見十右忠ゐ入道自休ゐ。ゐを用ひ合〜て以て。髭の意休ゐ。ゐ入ゐ。

江戸鹿の子を又ゐ。北八町堀藤屋清右忠ゐと云者。朝顔ゐ煎餅を賣ゐ。ゐ入の名品ゐ。ゐ也に。彩せん平ゐ。名ハ。ゐけゐ。其後正徳六年正月。堺町中村座ゐ。式例和曽我の二番目ゐ。梢楚子〜びかの狂言を。これを和助六と云。助六の扮作ハ鼓鞘。一ッ印竜。ゐ須流行の物ゐ。明暦寛文の

正徳三年始て助六の狂言をせし時の絵本をとりあつめて是をふかち近花助五郎清春ゞ筆之

宴来
此比
らくき
八助六
ちうり
とふ
一中
ゞ
の文之

此時ハくゝことようて屋上にはゞ狂言あり
今ハこゝをあゝ上れと狂言おりるこれ信ふ界ゝ之

以の歌舞妓狂言の古畠を又くるふ若衆形の熱踊ありけさべて紫のたちまちまちまちを江戸鹿子に云むう〜八美童に綾羅を身よまと八せ紫のきれをたちまちまちまちはしていろくの藝をあそ云く助六がてちまちまちまち其遺風ちるべ〜かるよ〜ほ〜ごとをふくくづめるもへまちまちあるまちまちふあれどこ〜べのかうらまちふちるしちまち

㊄ 十寸見河東傳

本姓八伊藤十寸見堂と号も。ゑに以て氏とも。俗河部屋茂左衛門と称る由に河東と云江戸品川町の茶家に志世利おかくるむ。酒をまちまちみ遊嬉〜つひふ産を破りて。羊太夫梁雲の門ふ。浄瑠璃曲を学びつひふ一家をを〜て出藍の誉れ〜。享保十年乙巳七月二十日病を以て没も享年四十二築地本願寺塔中成勝寺ふ葬る棺を送りて寺にいるる者千と以てかぞふ門人夕丈を

養ひて家をつぐ〜む二代の美を臣て。家声をおとさず。其ちがれ今ふ〜ゑぞ〜て河東節と称ど。江戸の名物とも牛島長命寺ふも。河東代〜の墓あり元祖の法名清西とあり以上成勝寺の墓碑の文ふ予が考へをくくへてもちて

袖ぐみ

江戸浄瑠璃太夫始祖
○薩摩浄雲　西保ノ頃人。○次郎右衛門入道

- 長門太夫
  - 肥前太夫　延宝ノ頃ノ人。元大坂町住　肥前ブシノ祖
    - 夕丈　門人養子
    - 河東
      - 河丈
      - 夕丈　門人養子
- 羊太夫　貞享元禄中人　幼名羊之丞　堺町アヤツリ芝居座元　剃髪シテ坂本梁雲ト云　甚古多町ニ住

(六) 竹婦人傳

享保の頃浅草竹門に住し俳諧師岩本乾什に河東したしく交り河東節の文をあまたつくれり竹婦人作とあるは皆乾什が文也

○繪蓬莱 ○浮む瀬 ふる茂がためにつくれるとぞ ○いの字扇 享保十九年訥子がために作る

○江の島 ○禿万歳 ○有馬筆 ○水調子 玉菊追善

○花かたみ 河東追善 此余なほあるべし

乾什は貫志沾洲の門人にて初名を呉丈といふ千歳児とも号す

宝暦九年二月十七日没ス

浅草寺境内人丸社の前に辞世の句を志るしたる碑あり

辞世 雪解や八十年のつかれもの

(七) 万字屋玉菊傳

吉原の盆灯籠は角町中万字屋勘兵衛がもとの名妓玉菊より

おこれるよしいへれども知れるはなしそめづくりならざればさらにいふべくもあらず。玉菊正徳中。七月のはじめ。身まかるよしを傳ふるは妄説也。享保十三年印本袖草紙玉菊追善句集といふものを案ずるに。享保十一年三月廿九日身まかりぬ。光感寺といふに葬るよし。ふみにも見えたるを志れがたし。始て灯籠をともせしも。享保元年といふは妄説也。玉菊死せし享保十一年七月新盆の節。新霊を祭るため中の町俵屋虎文揚屋町松屋八左衛門等。発起せしなり。其年に七月死せしとおもふ人おほし。竹婦人玉菊追善の浄瑠璃水調子を作りしは。享保十三年三回忌の時也。其年に二あり三ありて年をへてといふ文あり。玉菊曾て河東曲の三絃をよくひきし也。其年に十寸見蘭洲 江戸町二丁目つるこや庄二郎 そよなはしめて。かの浄瑠璃を作らしむ。其時乾什かの袖草紙

をあらはせる玉菊日ごろ大酒を好み。つひに酒のゆゑ世五才にて死せしとぞ。かの句集に酒のすきをいひうる句をおもひぬべし。あるべし。

水調子の文に。その醉さめの夢の世をかけるもうの花ゑ先をえげ。そのぶとうふ鏡のいへに橘の葉をいるるを。玉菊がもどむとのふらんらのうへ水調子の文を誣とまべし

(八) 玉菊拳まくり

享保中酒を好む者。拳相撲をいふことをしてもつとふをりんぶ玉菊そのうをを上まにせしに新吉原小田巨屋某玉菊がもとにおひし拳まくりをいふものを。今ふををむ甲かけをいもものごとく黒天鵝絨ゆてつくり金糸ゆて(玉)くのごとき紋をぬひうり是かの拳相撲ふもちゆるるまおるひまりとぞ

(九) 脫の喜三郎

晉子其角云中古野出の喜三郎を云者。片脫をきふれ骨に皮引くりて。又ぐるーかしを鋸ゆて肚のおぐよう。引きうて捨ゑう。

衆門をもうて。片枝を号ゑ。五元集 鷄合の巻ゆ又面。衆るふ。寛文中の俠者脫の喜三郎をいひーハ。是ちゑん

(十) 鎌田又八

伊勢松坂の産ゆて。江戸本町ゆ住ーー町人。鎌田又八を云者。世ゆ希有の大力ゑ 新著聞集 寛延二年板本 ゆうふ。鎌田又八江戸ゆあり時。幅一間ふおくく三尺の戸棚をこーらく。ふてをくをしゑ。明暦三年の回録の時。ぐんの戸棚ゆ。緒ゑを掛ゑ。緒綱を。一握ある檀の棒をふつめ。ゑ抱いゆーー葛籠二ゆうへゆ四ひつ。連着ゆてせゆ人。檀

侠者
脇の喜三郎

の棒をつきたてのさゝあげゐるものあれば。左右へ投中りつ。群雄を
なつけ。車長持のうへをふみ越て。浅草ゐのゞれ去じをきるせり。
此一事を以て強　のほど知てくるべ―

浅草観音仏殿の柱ゐ。又八ゞをよびの跡ゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。
貧八柱ゐ。ものゝ。あるりて。自然ゐくゞゐくゞけれども。又八ゞ大
刀のきゝゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。ゐるゐ。

十　加賀千代尼傳

千代ハ加賀松任駅金沢より洛ノ方へ四里去福増屋六兵衛つよ者の女にして。
をき時すゝ風雅の志あり。一時俳諧の句をせ―を。父母ゐ。てさゝ
うの志あゝゞゞて。行脚の俳人一説支考門人を家ゐとゞめて。学ばゝ
せりゝ。初十八歳の頃。金沢の福岡某ゞ家ゐ嫁す。其後夫身まゝり
りめゞ松任ゐりゝ。父の家ゐありて。ゐゐ。俳諧をゝ―。ゐ。三歳の

時京ホのぞり。摂州ホいくさうて麥林舍乙由の門人とあれり。ぜ七歳の時再上京を。こを後頭をそりて。圭系園といふ。容貌美中て言語少く。常ホ閑寂を好む。画も又よくせ。松任八幡〳〵の要路あれば。日毎　ホ諸國の旅客ホ交り。もとむるに應して。書画をあたえりるゆえに。其名海内ホきこえりるとあん

安永四年九月八日寂を享年七十四辞世

月も見て系ハ此世をとらし哉

金沢専光寺一向宗ホ葬る。又松任駅聖興寺に碑を立て。辞世の句を刻む。以上

千代尼の一筋松任駅村井屋ホ十郎ものがたりさ

○千代秀吟ちかし。物のたちぎりの句。おきて〻ふ寐て〻ふの句。百あれの句。

（一説ホ千代北越の吳後明ホ絵を学ぶ云。予こゝろ。後明の孫あり。淡角主人ホきゝえてとゝ〻ホ。こゝ説ホくゝりへきゝつゝき

鎌田又八強力圖

○又一書ニ「あるゝきたくとそあけふりまつふを千代ぶ初学の句
ありといふハ誤あらん。あるゝきたくとそ霖入りとふ伊勢
の涼鬼ぶ名句あり

十二　大橋柳町考

慶長の頃までハ江戸の傾城町処さぶゝ町ふ所ゝふあり。麹町
八丁目鎌倉川岸。大橋のゝち柳町ふあり。大橋ハ今の常盤橋の古
名ゝ。柳町ハ今の道三川岸の邊あるゝ云。乞普通の説ゝ。案ゝふ事跡
合考云。今の京橋具足町の東葦治の汐入を築立て。傾城町とゝ。
其地取丸ゝ。一方ロ平ゝて。南の片側をすゝ町。北の片側を柳町
ゝ名づけ。中一筋の通りを。中の町ゝ名づくゝ。是奇説ゝ。此説ふよ
ゝ。慶長の頃の傾城町ハ京橋の柳町欤。今猶京橋の北具足町

ふつゞきて。柳町すゝ町あり。両町背を合せゝる町ゝ。すゝ町ハ町のすゝ
級。今ハ炭町ゝかゝ。私ゝ竹町ゝ云。竹屋おゝ。享保五年写本の洞房語園ふ。吉原の角町。京
橋角町の傾城屋ゝ。此町ふゝ傾城町ありしゝ。住ゝ也ゝ。ゝ名づくゝあゝ。
京橋ふ傾城町ありしゝあゝゝけ。具足町柳町の間の通りを。
ゝゝて今ふ中通りゝ云ゝ。昔中の町ゝ名残欤。元のゝゝ
のふゝゝゝと柳。風ふふゝゝて。ゝちゝゝあびこゝふ歌ふゝゝゝ。町の入
口ふ大樹の柳二株ありゝ云。舊跡ハ。京橋の柳町ゝ。大橋柳町ゝ一口
ふいゝ傳へゝゝれど。大橋今常盤橋ゝ柳町京橋ノ北ゝハ。別所あるゝ知ゝ。
其後元和年中。今云大門通りふ。一廓を卸ゝゝ。元吉原の麹町。鎌倉
川岸。大橋。柳町。角町の者ゝゝ。ゝゝて一所ふあつまりゝるゝち柳
町の者ハ江戸町二丁目ふゝつる。也ゝに此町を本柳町ゝゝふ。角

町の者のこゝ也。其俗角町と名づけこるよし。これも写本 洞房語園の説に江戸町二丁目を本柳丁とかきこる沽券 今日あり。又洞房語園ふ又

○因こゝに角町仕立股引とゝふ。かく京橋の角町ゆて。仕立ものゝ也に。おゝいふ。迫きはまる。此名ふ股引を軒をきてあゝぬ

十三 地黄坊樽次酒戦

慶安の比。江戸大塚ふ。地黄坊樽次と云人あり。實名茨木春朔 古今 其族の侍医人 希有の大酒也。酒友門人甚おゝく。こゝに名をきこる人。又狂歌をよみぬ。或云鶏鳴声ゞ窪ふ居住のよ一 小石川柳町祥雲寺に。樽次の石碑あり。正面ふ不動の像をきざみ。右ふ酒徳院醉翁樽枕居士とあり。左りふ銘世二首あり

こゝ人のゝこゝをかたれ死出の山打越ゝぬぞ れもゝどふも露

面世三ゝゝ酒ゝ氏樽を呑ゝて身ハあき樽ふかゝるふゝゝ

臺石ふ延宝八庚申正月八日とあり。沽原説て樽次の遺骨を葬しハ谷中三崎妙林寺こゝ樽次貧の法名ハ信善院日宗こゝ祥雲寺の碑ハ酒門の高弟菅任口こゝ云者建一とぞ

○おゝ一ゝ武州大師川原ふ。大蛇丸底深こゝ云富農あり樽次ふおゝこゝふざる大酒ふて酒友門人おゝく名こゝこゝ人こゝ甚の子孫今ふ至ふ

續さゝみの

大師川ふにおひて樽次こゝ云もの孫ふ多也て

その蔓や西瓜上戸の花の種 沽園

○又おゝ一ゝ鎌倉ふ甚鉄坊常赤こゝ云者ありもゝ真言宗の僧

ゝ一ゝ還俗一樽次ふ医を学びて業こゝ樽次底深ふ。ゝゝ

こゝる大酒こゝ洞房語園ふ江戸吉原の医師縣弁見こゝ云者浅草が原心月庵ふて大師川ふ甚哲こゝ酒戦勝劣ゝこゝ記せゝハ此物がゝすゝゝ

○酒戦 爰甚の比大ふゝこゝあゝる樽次底深ふ大将こゝゝゝ敵味方こゝゝ

れゝゝこゝゝ酒兵をあつめ大盃をもつて酒量をこゝゝゝめて。勝劣こゝ

こゝゝこゝゝこゝふ大居目孔古仏の身こゝ一ふ法名あゝゝ

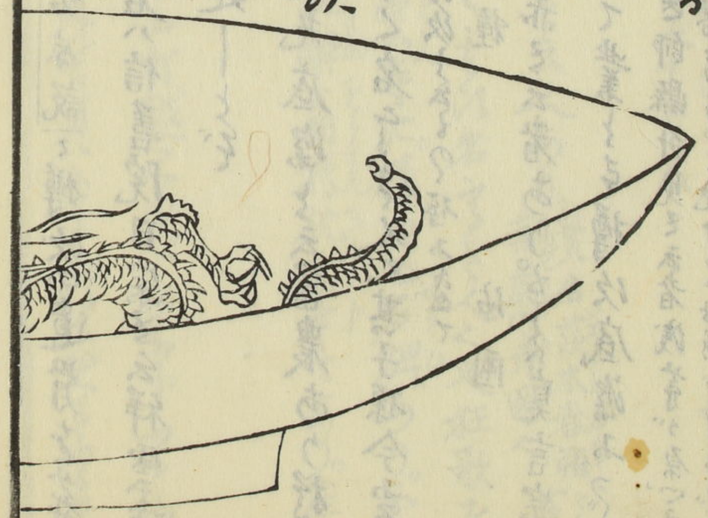
水こゝ記ふゝ

続猿みの 樽次 底深 あやまり こゝ 欠

蜂龍盃圖

予いまゝ大師川原にある
盃を尺だ出来る友人木村太朝ゑもん
平砂の絵をかゝしてこれ
あふハち絵の上に賛詞
あり左の如——

大塚乃大酒官城貢城移次
二子者ゑ乃ふ次郎　多夫太郎
よりめよくかめをとて来ふ作ふ
添蜂　龍と心へ為盃を仕作添と
ロロ

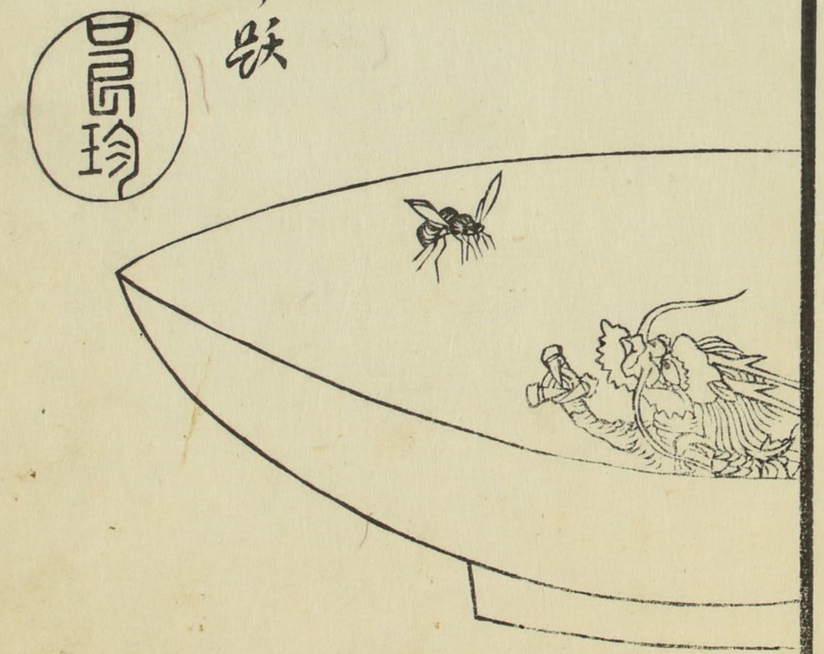


酒ふ　ゑも

子をゑ新
とゑ

花紋財

宋龍林
平砂者弁歌



昌員珍

酒の戦の図
ぎんてろ

たるつぐ
そこふく

○蜂龍盃　これ酒戰に用ふる七合入の大盃に蜂と竜と鱗の薄絵あるさまのものなり者をもさむらふこころとそ底深子孫大師川原の某氏今に藏す

○水鳥記　二卷あり桂次の自作底深と酒合戰の戯書之原本大師に原にあり世に流布の印本二ありあり一本ハ寛文二年京板一本ハ江戸板上木の年号なしともに絵入のかなき本之

㊀ 鹿藏猿次郎

貞享中の印本舞曲扇林二冊河原崎權之助作　これ草紙に六方と八佐渡島歌舞妓乃時名護屋山左が下人に鹿藏猿次郎とて両人あり山左が六條傾城町に行かよふ時供一ばるゞ鹿藏八生まれつき奴にて産毛に出てもあらけなきものをいひて奥あり猿次郎八自然とをつきに男ふりにてものいひうるさき毎笑をもよふせり佐渡島歌舞妓の時羅山文集を考て三左彼友人を役者にして佐渡島ふりこゝに奴と

鹿藏てゝめるよう鹿方ゝ云六方ゝ六法も誤りにや猿次郎八今の戯之ゝ八狂言のせりふに私八今日の猿馬鹿てこさるゝひて笑せりう浮猿若ゝいひくるゝかの鹿方八多門庄左衛門延宝の比より奴の風俗よくあり て袴を脱供奴つれてゝ鹿方あゝ鹿方ゝ前八紺のゝ法師にて髪をゝけもあ一にて鹿方ゝ鹿方ゝ猿若ゝ云ゝ案に坊主にて髪をもつゝ今奴丹あゝ云

一説風俗猿次郎ゝ猿若ゝ猿若ゝ八猿若三作江戸にて中村大勘三郎彦作ゝ云　以上　鹿方猿ゝ猿の説八信一ゝ云ゝ鹿屋猿次郎のゝ奇説ゝ八ゝゝかゝけゝ

雍州府志云其称猿若者三左衛門所毎赴之娼家奴隷男有猿者性魯鈍而不通人情三左衛門常玩之至今有狂言猿若是皆所假為猿若者也云　右ゝ三左ゝ八ゝ名ゝ三左ゝ八ゝ名ゝ又此説前の扇林の説ゝ似ゝ雍州府志八天和中の書ゝ奇跡考巻之五終

静嘉堂